

「豊田町香りの博物館」レポート

豊田町香りの博物館

「パルファン・フォーレ」

【目次】

- [施設概要](#)
- [開館の経緯](#)
- [コンセプトの考え方](#)
- [外観と構造・資金](#)
- [運営主体と入込客数](#)
- [入場客のプロフィールと広報活動](#)
- [取り組み](#)
- [館内レポート \(1\)](#)
- [館内レポート \(2\)](#)

【施設概要】

所在地 静岡県磐田郡豊田町立野576
 連絡先 0538-36-8891
 交通 鉄道：東海道本線豊田町駅 徒歩5分
 車：東名高速浜松I.C.より約15分、袋井I.C.から約20分
 開館時間 午前10時～午後5時
 休館日 毎週月曜日・祝日の翌日・年末年始
 入館料 大人300円 学生（高校生以上）250円
 小・中学生200円

公式ホームページ
<http://www.enshu-net.or.jp/toyoda/hakubutukan/kaori.htm>



「豊田町香りの博物館 パルファン・フォーレ」は、その名の通り「香り」をテーマにした博物館である。最近でこそ“食”のテーマパークのような、感覚中枢に訴える文化・集客施設が増えてきたが、豊田町がこの施設整備計画を立案したころには、まだまだ実物資料展示が主流であった。試行錯誤の末、平成9年にオープンした同施設の今をレポートする。

開館の経緯

豊田町は浜松市と磐田市に隣接した、人口約3万人の町である。両市のベッドタウンとして近年は宅地開発、企業進出も進んでおり、人口は増加の一途をたどっているという。実は以前ICカードの取材で町役場の方にお伺いした話によると、新しく家を建てる若い層の流入が多いのだそうだ。

都市集積化に伴い、昭和59年から東海道本線に町の玄関口としての駅開設が論議された。昭和60年正式決定を受け、駅新設と併せてその周辺36ヘクタールの土地区画整理事業を実施することとなった。なお、「豊田町」駅は平成3年12月に開設されたのである。

一方、土地区画整理事業の方は、他の町にはないような、住民が誇りを持てるようなまちづくりをするべきだとの考えから、昭和62年に地権者の代表で組織するまちづくり委員会を結成。開発のテーマが検討された。そこで、決定したのが「香り」である。

「香りの文化史」コーナー



「香り」に決定した理由は、まず、同町の「町の花」は、天然記念物の熊野（ゆや）の長フジに因んだ「フジ」で、「町の木」が「キンモクセイ」。どちらも非常に良い香りを放つ植物であることによる。なお、フジは豊田町のシンボルとも言えるほど縁の深いもので、町内の行興寺の境内には、「熊野（ゆや）御前」が植えた、樹齢数百年以上と言われるフジの大木があり、国・県指定の天然記念物となっている。

ここで、「熊野御前」について紹介しよう。平宗盛とのロマンスで平家物語に登場する、豊田町で生まれた女性である。そのラブストーリーだが、平清盛の息子・平宗盛が熊野を見初めてそのちょう愛を一身に受けて侍女から女官にまで上り熊野御前と呼ばれた。その後、郷里に一人残された母が病気になったとの便りを受け取った熊野は、宗盛へ帰国の嘆願をしたが、なかなか許しがもらえなかった。暗く沈む熊野の心を慰めようと宗盛は、京の清水寺の花見につれていった。ここで熊野は宗盛に次の一首を捧げた。

『いかにせむ都の春も惜しけれど なれし東の花や散るらん』

これは桜を母の命になぞらえて歌ったもので、この熊野の歌に強く心うたれた宗盛は、郷里に帰ることを許したという・・・。

熊野の優しい心根は世阿弥の作といわれる謡曲「熊野」として伝えられている。また、三島由紀夫の近代能楽集にも、熊野御前をモチーフにした「熊野」がある。

そして、この熊野御前はフジが好きで、行興寺に自らが植えたと言われたのが、「熊野の長藤」である。今でも春には見事な花を咲かせており、多くの花見客が訪れるそうだ。そして行興寺には熊野御前とその母が眠っている。

というわけで豊田町には熊野御前にちなんで能舞台が建てられたり、町内を走るバスは「ゆや号」という名前が付けられたりしているのである。

このように、香りのある花木と縁が深いばかりか、それに加えて町内には香料メーカー「高砂香料」の工場が立地している。最終製品を作っていないため、一般には知名度が低いですが、世界有数の香料総合メーカーである。

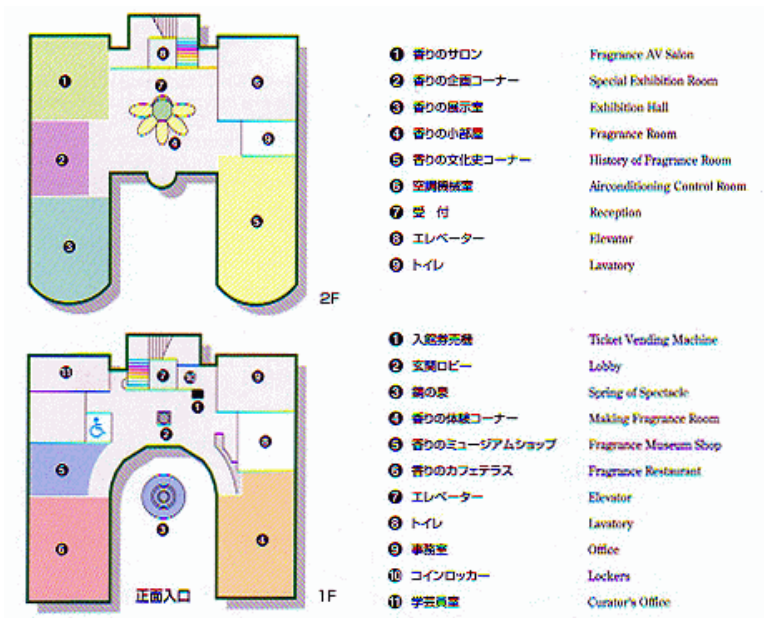
以上のような香りとの接点から、「香り」をテーマにまちづくりを進めていこう、となったわけだ。

しかし、昭和63年の時点では、「香りのまちづくり構想」という大きなくくりの中の1つとして「香りの博物館」という施設が提案されていただけで、その内容に関しては具体的な決着が見られないまま計画は中断していた。

平成6年になってやっと建設に向けての調査検討が役場で始まり、7年度に実施計画、次いで8年度には工事が始まった。そして7ヶ月間の準備期間ののち、平成9年11月1日に「香りの博物館」はオープンとなったのである。

企画展示「藤の花の香りと美 ～熊野御前を偲んで～」のカタログ





[次へ](#)



「豊田町香りの博物館」レポート

コンセプトの考え方

「香りのまちづくり」というが、そう簡単に翻訳できるコンセプトではない。博物館のテーマともなればなおさらである。「香りの森博物館」（大分県）のように、「香り」を施設テーマとした施設がいくつか見られるようになったが、昭和63年当時はそういった事例を探そうにも全く見つからない状況だった。「香り」は目に見えないもので、具体的にどのように整備を進めていけばいいのか、途方に暮れてしまったというわけだ。

そこで、同町はまちづくりコンサルタントと協議を重ねていきながら、関係者がみんなで少しずつ香りの知識を深めていき、苦勞の末、博物館の目指す方向として形作られたのである。それが「香りの博物館」「香りの公園」と、歩いて香りを楽しめる散歩路「香りの散歩道」の3つを柱とする整備であった。

そこで、1. 展示鑑賞を主体とした従来の博物館の概念から一歩抜けだし、五感を使った参加型の博物館を目指す、2. 香りをハーブや香水などに限定せず、また日本だけでなく世界の香り文化を幅広く紹介していく、3. 中身の充実を図るため、専門の学芸員を採用し、設計段階から参画させることで本格的な博物館を目指す、4. 博物館の活動に地域住民の参画を呼びかけ、生活に根付いた施設とする、5. そして、文化施設としての位置づけを第一として、観光的要素も兼ね備えた施設にする、の5つを規定したのである。

学芸員については、香りを専門としている人が少ないため、オープン前にこうした経験のある学芸員を東京からヘッドハンティング。設計など準備に加わってもらうと同時に、香りについての講師を担当してもらった。その学芸員はもともとは華道が専門で、それまでも華道関連の施設で働いていたことに加え、日本の伝統文化の「華道・茶道・香道」という分野に興味が高かったことから採用したそうだ。また、日本東洋工芸史が専門の東京芸術大学名誉教授・中野政樹氏に名誉館長に就任を依頼し、相談、アドバイスを受けた。

こうして、常設展示・企画展示とも全て独自に企画できるようになり、オープン当初は香水瓶の展示など、「誰でも思いつくような内容だった」（飯田正館長）のが、だんだんと企画ものを手がけられるようになっていく。この企画展示は年4回のペースで行っている。

また、教育普及事業として、講座、体験教室を開催している。これまでに行われたのは「香道・茶道体験」「アロマテラピー講話」「香りのうつわ作り講座」、子供向けの企画として「匂いチャンピオン大会」「香りの蒸留実験とせっけん作り教室」、「アロマキャンドル作り教室」のほか、クリスマスリース作り、親子ハーブ料理教室など、家族で参加できるようなイベントを開催してきた。

博物館には通常、研修室といった部屋が併設されているが、同館はそのスペースが確保できなかったため、館外の施設を利用しており、準備、片づけ、移動などに時間がかかり、効率の悪い運用を余儀なくされている。また、学芸員が2名のみで、企画展の準備と図録の制作にあたっているため、必ずしも満足のいくものとなっていない、とのことだ。しかし、どのイベントも好評だったそうで、そのような状況のなかでは健闘されているのではないだろうか。

モスグリーンの外観

外観と構造・資金

外観のカラーはモスグリーンを基調とし、中庭を囲むコの字状の構造である。この外観デザインは「古くから香りが富と権力の象徴として使われ、富裕階級の専有物だった歴史から、高貴なイメージのある宮殿風とした」とのことである。

建物は2階建てで、2階が展示スペース、1階はミュージアムショップ、カフェテラス、体験コーナーとなっている。1階は入場無料で、2階の展示部門のみ有料となっている。



規模は敷地面積が駐車場を含め1,276平方メートル、建物の延べ床面積は774平方メートル、このうち展示室が3室合計で165.4平方メートルである。

博物館を建設する場合、本来であればまず展示・体験内容を事前に調査研究し、運営にあたっての基本方針や方向を決定し、その上で用地の確保や施設設計に取り組むのが一般的である。しかし、同館については先に用地があり、展示内容や施設の基本方針の検討と平行して、面積に合わせた施設の建設を進める、という順序を取らざるを得なかったため、施設規模や展示スペースの配置などに若干不都合が生じている。

建設費の4億3千万円うち、4分の1は県の単独の補助金を利用し、4分の3は「地域総合整備事業債」をあてている。

[次へ](#) 



空間
通信
[トップ](#)

「豊田町香りの博物館」レポート

運営主体と入込客数

運営は、開館当初から2階の有料展示部門が町の直営、1階の販売体験部門がみなし法人となる管理運営委員会が町からの委託を受けて行ってきたが、平成11年9月より財団法人豊田町振興公社を設立により、運営が一本化され、振興公社が主体となった。

スタッフは町役場からの出向が2名で、振興公社の正職員は学芸員、調理師を含めて5人、その他パートのスタッフがいる。

オープン時間は9時半から17時までである。17時の閉館は早すぎると思うのだが、もっと遅くまでオープンするにはコストがかかってしまうので実現は難しいのだそうだ。ただし、17時間際に入ってこられた方には、閉館時間が過ぎても、できるだけゆっくり見ていただくようにしている。

平成9年11月のオープンから2000年9月末日までの入館者総数は161,678人。オープンした月には13,000人以上もの来館者があったが、現在は落ち着いてきており、少ない月で約2,000人、多い月で6,000人程度で推移しているようで、これはほぼ予定通りの数であるという。月別でみると、4月、5月と8月と休みのシーズンの来場者が多い傾向にある。

入場者数一覧

9年度	入館者数	10年度	入館者数	11年度	入館者数	12年度	入館者数
		4月	6,218	4月	4,122	4月	4,355
		5月	9,739	5月	6,396	5月	6,773
		6月	6,381	6月	3,217	6月	2,889
		7月	4,518	7月	3,075	7月	2,839
		8月	7,251	8月	5,387	8月	5,141
		9月	4,626	9月	4,342	9月	2,690
		10月	4,615	10月	4,704	10月	
11月	13,120	11月	5,076	11月	3,787	11月	
12月	4,833	12月	1,615	12月	1,402	12月	
1月	4,841	1月	3,017	1月	2,644	1月	
2月	4,855	2月	3,049	2月	3,002	2月	
3月	4,941	3月	3,270	3月	2,922	3月	
合計	32,596	合計	59,375	合計	45,020	合計	

入場客のプロフィールと広報活動

企画展示内容によって客層、年代層は異なる。

特に2000年は夏休み期間中に子供向けの企画をしたことから、小・中学生のグループ単位での来館が増えた。ちなみに学校単位での見学には現在のところ対応していないが、今後は町内の小・中学校の教師に招待状を配布するなどして、一度足を運んでもらい「香り」への理解の機会を作り、どのような形で学校との連携が図れるのかを検討していきたいそうだ。

平日は女性の団体客が多く、来館者の7割は女性である。休日は家族やカップルなどの入館が増えるため、男性の比率が上がる。

地元住民の来館を期待しているのだが、小さい町なので入場者はそれほど増えるわけでもない。それでは運営が成立しない、との判断か

夏休み期間中に開催された企画展のチラシ

ら、文化施設の位置づけとしてだけでなく、広い地域からも集客できる施設として、観光の要素も加味している。

県外からは、中京圏が近いこともあり、愛知、三重、岐阜から訪れる客が多い。まだ浸透していないというギャップがある。それでも、全ての人に「香り」を文化として認知させるにはある程度限界がある、との認識である。



地元の人の中には、博物館と名の付く施設に初めて足を運んだと思われる人が多い事から、博物館と地域の人々との距離を縮めることには成功したと考えている。博物館や美術館に対して敷居の高さを感じていた人々に、“知る楽しさ”を提供する機会となった成果といえるだろう。

オープン当初はマスコミで数多く取り上げられ、現在でも地元のメディアやNHKからの取材が来るそうだ。また、紀行番組などで取り上げられることもたびたびあるという。

その他の広報活動としては、ポスターを他の美術館、博物館などに定期的に送付するのはもちろんのこと、イベントなどを女性雑誌に定期的に取り上げてもらっている。

また、館内にアンケート箱を設置し、常時来館者の声を集める努力も続けている。寄せられた意見では、スペースにもう少し余裕が欲しい、といった声が多い。この点については改善が容易ではないため、見応えがあるような展示の方法が「永遠の課題」であるという。その他、「臭い」とか「においが強すぎる」といった声もあるそうだが、これは個人の好みの問題で、おおむね「香りで心が和んだ」といった、良い評価のほうが多い。

なお、来館者データベースはまだ構築されていない。当初は展示内容などお知らせの送付を希望する方は氏名、住所を記入してもらうようにしていたが、多くの来館者が希望するため、郵送料などコストの問題から、現在は中止している。非常にもったいない話である。

情報提供手段として[ホームページ](#)を活用することになっているが、現在は町役場のホームページの一部を間借りしており、更新がしづらい状況だという。いずれは独自のホームページを立ち上げ、常に新しい情報を提供できる環境を整えたいと考えている。残念だが、予算の関係でまだ手がつけられていないのである。

取り組み

実は、豊田町には「新造形創造館」という芸術体験施設がある。ここはガラス・金属造形の体験教室や生涯学習としての教室が開かれているほか、ギャラリー、レストランもある。また、若い造形作家の卵が所属して、創作活動を行っており、そのオリジナルの作品が購入できるショップも併設されている。ここではポイントカードを発行していて、体験教室やショップ、レストランなどでの支払いは500円につき1ポイントとしてハンコがカードに押される。これを見習い、「香りの博物館」でも近いうちにポイントカードを導入する予定である。

豊田町では、この「新造形創造館」と「香りの博物館」を両輪に、魅力を対外的にアピールする方針で、「豊田町に来れば楽しく一日過ごせる」といった位置づけで連携を図る。

さらに、他地域の施設ともネットワークを構築し、その中で集客やコミュニケーションが可能な仕組みを作りたいという。行政間の連携は難しい。施設やイベント等のチラシ類を周辺市町村でお互いに置く、というところで終わっており、“例によって？”なかなかうまくいっていない状況である。

「豊田町香りの博物館」レポート

館内レポート（1）

飯田正館長にお話を伺ったあと、さっそく館内を案内していただいた。

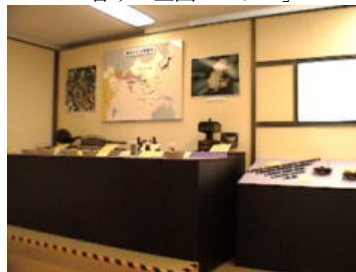
まず、2階の展示フロアだが、丸みを帯びた白い小さな部屋がいくつもくっついていて、ここは「香りの小部屋」と名付けられていて、一つ一つが花びらの形をして、5つの花びらで花が形造られていた。上から見るとすぐに花と気づくだろう。横から見ただけでは説明を聞かないとそうは見えなかったが・・・。

“花びら”ごとにドアが付いていて、中はとても狭い。椅子とモニターが置かれ、ボタンを押すとそのモニターに風船がふわふわと浮かぶ立体画像が登場する。このバーチャルの風船に手を伸ばすと、はじけて香りが流れ出すのだ。私が試したものは緑色の風船で、はじけるとメロンの香りが部屋いっぱいに広がった。その後、画面ではメロンの香りには人の脳にどんな効果があるか、とか高貴な香りとして昔からヨーロッパで珍重されてきた、といったメロンの香りにまつわるトピックスを学ぶことができる。ただ単に香りの知識吸収に止まるだけでのではなく、バーチャルな仕掛けにひとひねりあってなかなか面白いものだった。ただし、コストがかかっているとは思うのだが、一度体験すればもういいかな、というのが実感である。

花びらの形をした「香りの小部屋」



「香りの企画コーナー」



手にとって嗅いでみる。不思議な香り。



次は「香りの企画コーナー」。私たちが訪れた時の企画は「和の香り」であった。昔から日本で使用されてきた、さまざまな香木や香りの原料となる植物の実物展示である。『切り株』や『木材』の状態の大きな香木がいくつも置いてあり、また小さな木片状の展示物はかご（ザル？）に入っていて、実際に触れて匂いを嗅いでみるができる。ただし、貴重なものはガラス箱やガラス瓶に納められていて見るだけである。

これらの香木がどのような過程を経て香りとなるのか、どこの国から日本に伝えられたのかなどがパネルで説明されていた。もちろん、効能やどのようなときに使用されたのか、といった説明も加えられている。例えば、インドのカモミール地方から伝えられた「唐木香（からもっこう）」はキク科の植物で、胃腸薬として用いられている、「沈香（じんこう）」は武士が出陣に際して、精神統一をしたり、兜に香を炊き込めたりして戦に臨んだ、といった内容である。

香木が畳の上に置かれていることもあり、和風な雰囲気いっぱいの展示室だった。

隣は「匂いの体験ゾーン」である。

入り口を入ると右脇に5つの大きな箱がおいである。これは『？（ハテナ）ボックス』で、ふたを開けて匂いを嗅いで、何の匂いかを当て

「？（ハテナ）ボックス」

て楽しむものである。

そのほか、さまざまな香料が詰められたガラス瓶が並べられていて、自由に嗅ぐことができるようになっている。当日、中年の女性グループが入ってきて、「? (ハテナ) ボックス」のあちこちを嗅いで盛り上がりつつあった。

この部屋の名称は「香りのサロン」という。壁には100インチのスクリーンと、2台のモニターがあった。映像で香りについて基礎知識を学んだり、講座が開かれたりすることもある。



続いて「香りの展示室」に入る。ここがメインの企画展示コーナーになっており、「匂いの不思議・香りの秘密II」展が行われていた。

「動物や植物の匂いのナゾにせまる」がテーマで、コンドルやハイエナは屍肉の匂いを良いニオイと感じ、探し当てて食べることでより森がきれいになる、ハチは階層分化フェロモンにより社会生活を営み、階級社会を維持している、サケは匂いで自分の生まれた川を判別して戻っていく、といった自然界の匂いに関するさまざまな不思議について、ぬいぐるみや模型、パネルなどを使って説明している。

まったくリアリティのないぬいぐるみや模型が多用されているため、真剣に見ようとしている向きには少し（かなり？）気がそがれてしまうかもしれないが、誰にでもわかりやすいアピールと割り切れば、それなりに楽しく学ぶことができそう。

「香りの展示室」



ぬいぐるみでわかりやすく解説

1. 「サバンナの掃除屋」のはじまり
2. ライオンがシマウマを捕まえて食べている



3. ライオンが食べ終わり、
続いてコンドルとハイエナがやってくる
4. おかげで森はきれいになる



常設展「香りの文化史コーナー」は、香りと人類の関わりの歴史を紹介している。ヨーロッパで使われていた実物及びレプリカの香水の瓶、日本の香道での香具などが展示されている。また、イラストやテレビモニターで四大文明における香りに関する史実やエピソードが解説されている。人類と香りの関わりが非常に深かったことがわかるような構成となっている。このコーナーは他とは雰囲気異なり、学問的な雰囲気の漂う演出となっていた。

「豊田町香りの博物館」レポート

館内レポート（2）

1階は「香りの体験コーナー」「香りのカフェテラス」「香りのミュージアムショップ」で構成されている。

「香りの体験コーナー」はパソコンを使って自分だけの香りづくりが体験できる、同館でも人気コーナーである。ピーカーに入った8種類の香りを嗅いで気に入った番号を選ぶと、パソコンソフト「マイ・フレグランス」が自分に最もふさわしい香りを診断し、さらにいくつかの質問に答えていくと、そのデータを基に香りを調合して、その人の志向にあったオリジナルの香りが創作できる、という仕組みだ。さらに、自分の好きな香水瓶に絵付けをしたり、サンドブラスターで香水瓶の表面に加工したり、オリジナルのラベルを貼ったりして、世界に一つだけの自分の香水が完成する。

このコーナーはカフェの雰囲気である。大きなガラス窓から日の光が注ぎ込み、窓の外は公園の緑が広がり、フローリングの床には木の丸いテーブルと椅子が置かれている。壁にはヨーロッパ風の彫刻を施したような装飾を施していて、格調を演出する。奥にはカウンターに女性スタッフが二人いて、壁には色とりどりの香料が並べられているところなどは、Barのカウンターのようなようである。

カフェのような「香りの体験コーナー」



「香りのミュージアムショップ」にはハーブティー、ポプリ、香水、芳香剤など生活雑貨を中心に香りに関連するさまざまなグッズがところ狭しと置かれていた。ラベンダーの入浴剤のようなありがちなものも多いが、書籍やきれいな香水瓶もあり、よく探せば一つはお気に入りが見つかるのではないだろうか。

購入したおみやげ。左・中は香水瓶をデザインした絵はがき、右はタンスポプリ





「香りのカフェテラス」はちょうどランチタイムでかなり混み合っていたが、取材終了後は遅いランチをとることにした。そのころでも、店内には3組ほど客がいたが、繁忙時が過ぎてのんびりムードだった。この、のんびりムードが従業員にも感染したのか、それともいつでもこんなペースなのか、注文してから出てくるまで、かなりの時間がかかった。

さて、日替わりランチは「チキンの香草焼き」で、ハーブティーとデザートも付く、女性向けな感じのメニューである。じっくりとオーブンで焼いてくれたのかも知れないが、短気な編集長はイライラし始めていた…なんだかこういう目によく遭うような気がするのだが…。肝心の味だが、なかなかだと評価している。しかし、女性向けのせいかが量が少な目で、編集長だけでなく私にも少し物足りなかった。

さらに、気になったことがある。それはトイレである。

「香りの博物館」ならさぞかしい香りがすると信じて疑わなかったのだが、一歩中に入ると、例のパブリックスペースでのトイレの臭いそのものである。芳香剤らしき匂いは全くしなかった。これには大変がっかりした。入ったタイミングが悪かったのではなく、根本的なものだと私は感じた。香りは「文化」であっていいのだが、第一義に「消臭」ではないか。このような施設でトイレがクサクていいのか！と私は声を大にして言いたい。

同館の真向かいにある「香りの公園」は、向かって右側が日本庭園風、時計台となっている噴水を挟んで左側がハーブなどが植えられた西洋風、時計台の奥は広場になっていた。ここは残念ながらあまり手入れがなされていないようで、ハーブ類は枯れかかったものが多く、池は緑色に濁っていた。

平日の昼間はこんなものなのか、小さな子供連れの親子が一組、広場で遊んでいただけで閑散としていた。

この公園から同館を見ると、敷地の境界ぎりぎりまでマンションが建ち、干してある洗濯物がイヤでも目に入る。

たとえば、カフェテリアを公園の敷地内に作れば、博物館の敷地はもう少し広くなり、食後に公園を散策しようという人もいて、公園、博物館両方の賑わいが生まれるだろう。

公園の敷地にカフェテリアを作ることが妥当か、といった問題やコスト面など課題はあるだろうが、狭い博物館とスペースが生かされていない公園が対面しているところを目にし、もう少しうまくスペースを使えなかったものかとの

「香りのミュージアムショップ」



隣のマンションには洗濯物が…



2階から見た「香りの公園」




印象を持った。

全体的に見て、規模は小さいながらもすべて自主企画の運営で、集客にかなり健闘している様子である。企画展示、ガイドブック、イベント、ホームページなどをひとつひとつ丁寧に作っていけば、今後も長く地域に愛される施設になるのではないか。

それまでどこも考えついでいなかった「香り」をテーマにするという、大胆な試みを実現した豊田町の活動は、その後の博物館の一分野を切り拓いたといっても言い過ぎではないだろう。今後にも期待したい。

(編集部 池上)

 [豊田町香りの博物館TOPへ](#)

